

～初夏の訪れと共に～ 郷土館を覗いてみませんか??

「旧塘路駅通所」6月より開館!

冬期間は閉鎖している、標茶町郷土館隣の「旧塘路駅通所」を6月1日から開館します。駅通内の小上がりで休憩もできます。

ぜひお越しください。



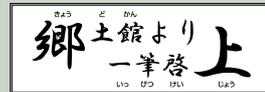
自然系学芸員が替わりました



5月から郷土館に勤めることになりました、渡邊淳一です。大学では、自然と人の関わりについて興味を持ち、勉強してきました。本州の大学在学中、道東に帰郷するたびに、牧草の緑と空の青のコントラストの美しさに、懐かしさと憧れを感じていました。このたびは、豊かな自然によって育まれた歴史と文化を持つ標茶町で働く機会を頂けて、とても光栄に思います。自然科学系の学芸員として、分からないところがたくさんあると思いますが、地域の皆さんから教えていただきながら、頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひします。

大川のほとり

—郷土館だより(第66号)—
☎487-2332
開館時間
午前9時30分～午後4時30分



「昔に郷土館へ来たけど結構変わったなあ」と言う声を、町内の方からよくお聞きします。10年前と比べ館内の約7割は新資料と解説を加えた展示に変わっています。どうぞお越しください。(坪)



釧路集治監人物伝 **最終話** 中編 2

釧路集治監看守長 **愛の典獄** 有馬 **四郎助** しろうすけ

(前回のあらすじ) 有馬四郎助は文久4年(1864年)鹿兒島県鹿兒島市下荒田町にて益満喜藤太の四男として生まれ、士族である有馬平八の養子となり有馬姓を名乗りました。幼少より成績優秀だった四郎助は学校卒業と同時に学校教員や警察巡查の職につきませんが、明治19年に釧路集治監看守の全国応募を知ると直ちに依願退職し、これに応募します。鹿兒島にいた四郎助は母を連れておよそ2カ月にわたる船旅の末、標茶へと到着しました。この時四郎助は22歳と若年ではあるものの、釧路集治監典獄大井上輝前は四郎助の素養を見抜き、看守長として異例の抜擢を行ったのでした。

四郎助が着任するとほぼ同時に、釧路集治監官署(現標茶町郷土館)が落成しました。真新しい木の香りが漂う新庁舎が四郎助の職場となり、心機一転集治監の職務に励むようになりました。なお看守長の職務は、勤務する看守への監督や収監囚人数の把握、囚人の体調および風紀の管理のほか、囚人の行う作業工程を典獄と相談し、効率よく進めるべく奨励するなど多岐にわたっていました。月給は35円で、前職である鹿兒島県警部補時代の月給が12円であったことから、いかに高額であり重要な職務であったのがわかります。

当時の釧路集治監では多数の囚人を使い、過酷な硫黄採掘作業や道路工事建設が行われていました。道路建設短期落成を目指した突貫工事やそれに伴う人命軽視の危険作業、こうした作業は現地でカリカン(仮設監獄のこと)と呼ばれる丸太小屋を設置し、囚人たちを収容しつつ行われました。囚人たちは集治監外で行われる大変な作業の中、看守らに隙があればいつでも脱走することを考え、また看守らも囚人の暴動に備えるべく常に強い態度をとりました。四郎助は事務のほかに監外作業への監督も行って

「標茶町が財政再建団体に!」

『広報しべちや』は昭和40年から発行されており、今年で50年を迎えます。本町の広報誌は昭和24年に『月間標茶』後に『標茶公民』となったを公民館から発行した事が始まりとされ、後に町長となった高島幸次氏(当時は公民館長が大きく関わっていました。昭和31年から『町政だより』というタイトルで、役場より毎月20日に全戸配布されるようになりました。郷土館に資料として保管されているのは、昭和30年6月20日発行の第6号からです。



第6号最初の見出しは「町財政建て直しのため再建法の適用を申請」です。このころ本町の財政は非常に悪化しており、財政再建団体適用の申請を受ける事態

となっていました。この財政再建団体、近年では夕張市が適用された大きな話題となりましたが、昭和30年に本町も同じ状態になったのです。

本町の財政が赤字となったのは、戦後日本経済が悪化したことや新規入植者(戦後開拓者)受け入れのため開拓地の生活基盤整備(主に道路整備など)の実施、冷害や洪水、火災の頻発などが重なったことが原因でした。そのため町の人たちも「町財政の赤字については仕方がない」という認識でした。『町民だより』には「自治体の自主性が失われるのではないか」など、本町の行く末を心配する声が多数掲載されています。なお同時期に釧路町と浜中町も財政再建団体になっており、釧根地域全体が大変な時期だった事が伺えます。

昭和31年5月30日に標茶町は財政再建団体の指定を受けました。再建期間は昭和38年までとなりましたが、昭和35年には財政再建が終了します。迅速な財政再建に成功した理由は、役場から住民に対しての積極的な情報開示と、町の人たちが一体となって財政再建に協力し進めた事が大きな要因でした。今からちょうど60年前に起こった標茶の重大事件です。

いたと思われま。四郎助は看守・囚人らへ厳しい統制と指揮で臨み「鬼看守長」または「鬼有馬」と呼ばれました。四郎助が本町へ来てから約1年後、明治21年4月にキリスト系教誨師の原胤昭が(はらたむき)大井上典獄に招聘され釧路集治監へとやってきました。クリスチャンである大井上は、明治政府の方針でもある懲罰的な監獄のあり方に疑問を持ち、同じクリスチャンで人道主義的な考えを持つ原胤昭を監獄改良の片腕として呼んだのです。ただし四郎助自身は両親の感化や郷土の気風から仏教に帰依しており、キリスト教を「耶穌教」として知ることもなく異端視していました。そのため大井上典獄は敬愛していたものの、キリスト教系教誨師の導入は嫌っていたようです。当時を考えるとこうした集治監職員はほかにもいたことでしょう。しかし、原の囚人に対する愛情ある教えと態度へ接するに従い、次第に心が動かされていきました。

原が着任から1ヵ月後の5月、四郎助は1年半ぶりに長い休暇をもらい、郷里鹿兒島へ帰って(み)蓑田ミネと結婚します。そして新妻のミネを伴って本町へ戻った後2年間釧路集治監で勤務し、明治24年に空知集治監の第2課長として転出しました。

四郎助の釧路集治監における任期は約3年ほどでしたが、標茶で典獄大井上輝前や教誨師原胤昭らの影響を受け刑務官としての基礎を築きました。そして最も大きな影響として監獄とは、囚人が犯した罪の分だけ苦役を課す事とする懲罰目的の施設ではなく、囚人に罰を与える事を目的とせず、更生させて社会復帰を目指す、更生施設とするあり方を学んだ事です。こうした考え方は今でこそ当たり前ですが、当時としては非常に先進的な考えだったのです。空知集治監へ転任した四郎助は、この地で人生最大の理解者と巡り合います。(つづく)



昭和5年頃の有馬ナカ

本名はミネだったが、四郎助の妹もミネだったため同名を避けるため、ナカに改名した。『人物叢書 有馬四郎助』より引用

非常に先進的な考えだったのです。空知集治監へ転任した四郎助は、この地で人生最大の理解者と巡り合います。(つづく)